

## 木曽川の流路変遷

### (1) 木曽川

木曽川は、長野県木曽郡木祖村の鉢盛山（標高 2,446m）を源とする、幹川流路延長 229km、流域面積 5,275km<sup>2</sup> の一級河川です（図 1）。河床勾配は、1/500 から 1/5,000 程度で、河口域はほぼ水平です（図 2）。長良川、揖斐川をあわせて木曽三川と呼びます。河川は山地から平野に出ると、流速が小さくなるため、運搬してきた堆積物の中で砂礫を中心に堆積します（礫は重く、砂は最も早く堆積しやすい）。扇形に広がるのが多く扇状地と呼ばれます。木曽川は犬山付近で濃尾平野に出ますが、その扇状地は大きく犬山扇状地と呼ばれます。扇状地は、砂礫のためその上を流れる河川は伏流水になりやすく、一番先端（扇端）で湧水となって出てくる特徴があります。現在の木曽川は扇状地のほぼ北の境界付近を流れています（図 1）。

大きな河川は領地（ここでは尾張国と美濃国）の境界になることが多いです。

しかし、台風などの豪雨が起ると河川は氾濫しその流路を頻繁に変えます。木曽川も流路を何度も変え、国境は変り、争いの原因にもなりました。一番の変化は、**以前の木曽川は現在よりも北側（岐阜県側）を流れ、長良川と合流していたことです（図 3）。**

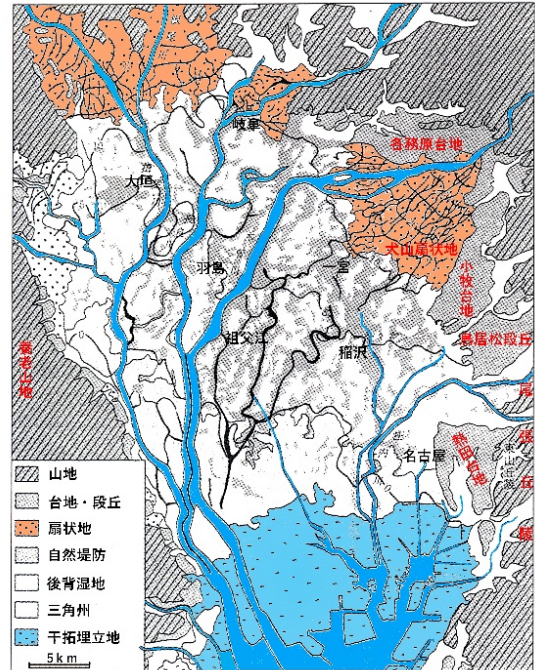


図1 濃尾平野周辺の地形(野上ほか,1994を改)

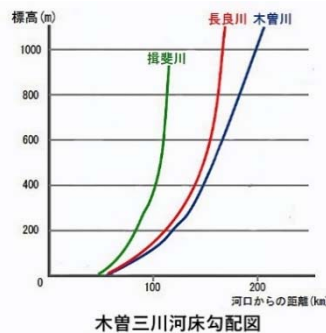


図2 河床勾配図(国交省, 2007を改)

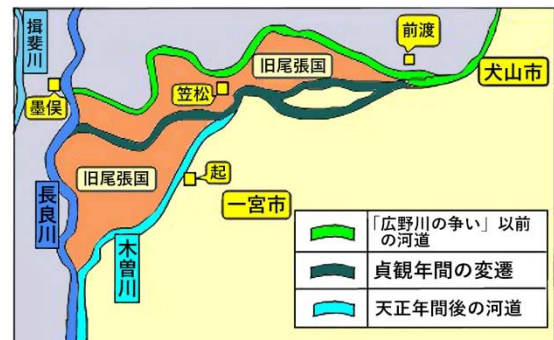


図3 木曽川の流路変遷図(URL1)

広野河の争い：866年頃起きた広野河の河道の変化に伴う尾張国と美濃国の争い  
貞観年間：859年～877年

天正の大洪水：1586年6月の大洪水で、木曽川の流路は大きく変化し、ほぼ現在の河道を形成した。

### (2) 各務原市川島笠田町

11月末に川島笠田町にあるかさだ広場（国営木曽三川公園のひとつ）に木曽川の旧河道を見に行きました（図4）。図5の青く塗った細長い部分に河川礫が見られるくぼ地があります。川島地区は、



木曽川中流域で川幅が広がり多くの輪中が形成されていました。なぜこの川幅が広がったのか興味があります。現在の河道はすぐ西の笠松付近で西方向から南（南西）方向に向きを変えています。河道の屈曲が水流を弱める原因の一つかなと思いますがよくわかりません。笠松付近に南北に走る断層がありそうなのでその影響もあるのかなと思いますが確認できません。図6は明治時代の川島村の土地利用図で、桑畑が目立ちます。図7は明治～昭和初期の図です。図中の黒太線は築捨堤（尻無堤）や猿尾（後述）です。築捨堤



図4 かさだ広場で見られる河道跡



図5 かさだ広場の河道跡の地点  
(地理院地図に加筆)



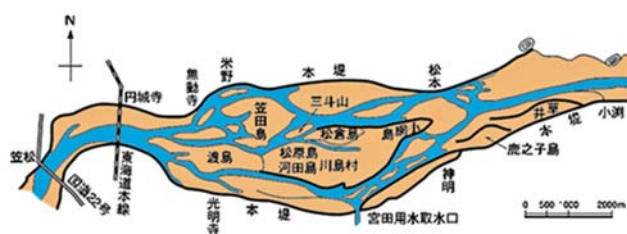
図6 明治時代の川島村（鷲見，2024に加筆）  
黄色・赤・緑色の線は現在の道路

は上流側にのみ堤防が築かれています。大正時代に川島村（現各務原市川島）の乱流区域の改修を行い、洪水時の主流を本川に導き、異常出水の時には南派川、北派川に分流するようにしました。昭和初期にかけて川島地区では建築資材として河川中の玉石を採集していたそうです。

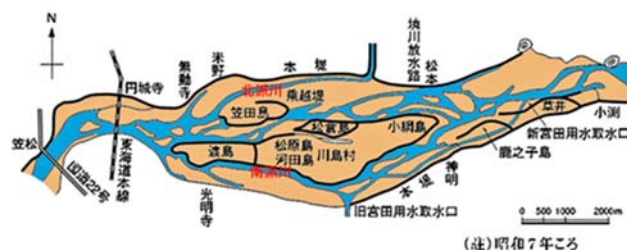
### （3）輪中・猿尾・聖牛

繰り返す洪水氾濫を防ぐため、人々は川の流れを弱める工夫や、洪水時の避難対策などしてきました。輪中（図8）や水屋などが有名です。近年までは何カ所か見られましたが、現在は限られた（人為的に保存されている）ところしか見られなくなってきました（図9の水屋も現在は改築されています）。

江戸時代から明治時代に木曽川で多く築かれた堤防の一種に猿尾さるおがあります。猿尾は河道とほぼ直



木曽川上流部の流路（改修前一大正初年頃）



木曽川上流部の流路（大正後一昭和7年頃）

図7 明治～昭和初期の川島地区の河道  
(URL2に加筆)



角に、本堤から河川に向かって設けられた小高い堤防です（図10・11）。洪水の水流を受け止め、流れ

の勢いを落とし、堤防（本堤）を守ります。この名はその形が猿の尻から伸びた尾に見えることからで、愛知県、岐阜県の本曾川沿いで呼ばれます。現役のものほとんどありませんが、石積みの堤は本曾川沿いでは何カ所かで見られます。その他にも石を積み上げて作られる三角錐的な櫓のような構造物で、川の流れを制御し、河岸の浸食を防ぎ土砂の堆積促進、瀬や淵の形成に役立つとされる聖牛も見られます（図12）。江戸時代に徳川家である尾張藩の領地を水害から守るため本曾川左岸（愛知県側）に右岸より1m近く高い堤防が作られ、お囲い堤と呼ばれたことも有名です（図13）。これによって本曾川から南に流れる多くの支流が無くなり、洪水対策には役立ちましたが、肥沃な土がもたらされなくなったり、農業用水をつくる必要が出てきました。



図8 輪中（岐阜県海津市）



図9 水屋（三重県長島町）

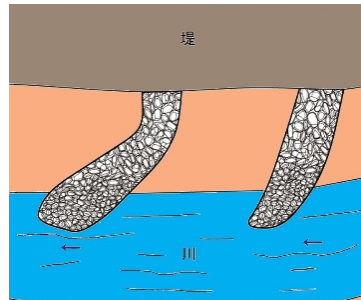


図10 猿尾↑(URL3に加色)

図11 猿尾→各務原市前渡西町



図12 聖牛（扶桑町）↑→

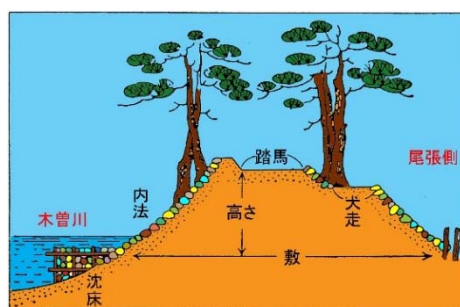


図13 お囲い堤 上：千田，1984を改右はすいとびあ江南 展望タワーから撮影



#### (4) 明治改修

木曽川、長良川、揖斐川はみな濃尾平野の西側に寄って流れていますが、その大きな原因は、濃尾平野地域が何百万年も西に傾く地殻変動(濃尾傾動運動)を受けているからです。接近して流れる三川は水量や流速の差があるため水位に差が生じ(図14)、洪水時には木曽川の水が揖斐川に流れ込み、西側地域を中心に氾濫、湛水が起きました。古くから洪水対策として堤防の建設と三川の流路を分離する工事が行われてきており、1754年の薩摩藩による工事は有名なものです。本格的な工事はオランダ人のデ・レイケの指導の下に行われた明治改修(1887~1912年)からです。佐屋川を廃川にして、下流域に新たに木曽川を掘削してつけ替え、三川を完全に分離しました。多くの住民の転居が必要になり、さらに濃尾地震や大洪水に見舞われ、日清・日露戦争もあって難工事だったようです。

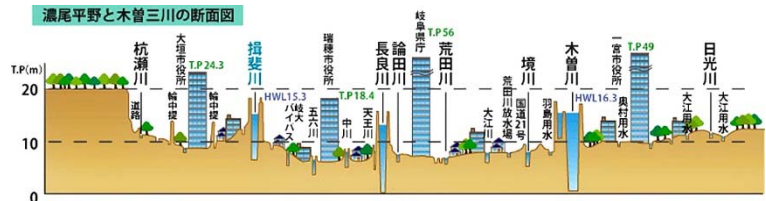


図14 木曽三川の断面図 (URL4)



図15 デ・レイケ像  
木曽川文庫



図16 明治の改修 (Wikipedia) →  
原図は木曽川上流改修工事平面図

#### 主な参考引用文献

国土交通省, 2007, 木曽川水系の流域及び河川の概要(案)。

松沢 勲・桑原 徹, 1964, 濃尾平野の地下構造とその構成. 伊勢湾台風災害の調査研究報告, 14-39, 名古屋大学災害科学調査会.

水谷英志, 2011, 明治期における木曽川改修工事反対運動と「成工式」. 歴史地理学, 53-1 (253), 37-54.

野上道男(編), 1994, 日本の自然 地域編 4.中部. 182p.

千田英元, 1984, 木曽川の水と尾張地域. 岐阜県畜産会, 327p.

鷺見隆司, 2024, 木曽川と川島〜大河の流れとともに生きて〜. KISO, 129, 8-10.

山田昭彦, 2014, 広野河事件について. 岐阜県博調査研報, 35, 1-8.

URL 1 : <https://suimonken.server-shared.com/ksgwmngtr/kiso01.html>

URL 2 : [https://www.mlit.go.jp/river/toukei\\_chousa/kasen/jiten/nihon\\_kawa/0509\\_kiso/0509\\_kiso\\_01.html](https://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/0509_kiso/0509_kiso_01.html)

URL 3 : <https://www.pref.gifu.lg.jp/page/254229.html>

URL 4 : <https://www.cbr.mlit.go.jp/kisojyo/yokoyama/rekishi/chikei/index.html>